

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第945号 平成27年6月11日

## 水族館からイルカが消える？

日本の動物園水族館協会（JAZA）が世界動物園水族館協会（WAZA）から会員資格停止の通告を受けたという問題は、日本国内では衝撃を以て受け止められています。

WAZAの通告というのは、和歌山県太地町で行われているイルカの追い込み漁が残酷であるとして、この追い込み漁によるイルカの入手を容認しているJAZAを資格停止すると共に、追い込み漁によるイルカの入手を禁止するというWAZAの方針を受け入れなければJAZAを除名するという、大変厳しい内容でした。

私達からすると、寝耳に水、突然の通告という感じがしますが、WAZAは2004年（平成16年）の総会において、日本の水族館が追い込み漁によるイルカを入手している事に対して非難決議を採択している事を考え合わせると、来るべきものが来たともいえます。これに対して、JAZAも手を拱いていた訳ではありません。2009年にWAZA会長が来日した際、会長から「水族館用と食用とで漁を分けられないか」との提案があり、JAZAもそれを受け入れて入手方法を改善して来た経緯があります。しかし残念ながら、WAZAはそうしたJAZAの取り組みを一顧だにしないまま最後通牒を突き付けたというところです。

今回の問題については、JAZAが追い込み漁によるイルカの入手を断念し、WAZAへの残留を決めましたので、一件落着のようにも見えますが、今回の問題は、イルカの追い込み漁そのものを止めさせようという国際的な動きと連動していると考えるべきで、まだまだ紆余曲折がありそうです。

また、今回の一連の問題の中で良く理解出来ないのは、WAZAは何を持ってイルカの追い込み漁を残酷だとしているのか、という点です。今の状況は、理屈はどうあれ、とにかくイルカの追い込み漁は禁止すべきだという流れになっています。

太地町で行われているイルカの追い込み漁というのは、イルカを湾内に追い込み、その出口を塞いで捕獲するという伝統的漁法で、法令に基づき適切になされており、国や県も許可を出しています。

この追い込み漁では、かつては銚子でイルカを突き刺して捕獲するという事も行われていたようですが、現在では、脊髄を切断する特殊な道具を使って、一瞬で捕殺し、血が流れないようにしているとの事ですから、湾内が血で赤く染まり、イルカ

が悶え苦しむというような残酷な場面を見る事は無くなっているようです（吉岡逸夫著「白人はイルカを食べてもOKで、日本人はNGの本当の理由」）。

それにもかかわらず、イルカの追い込み漁が残酷だというのは、反捕鯨団体のネガティブキャンペーン、取り分け、2009年に放映された「ザ・コーヴ」というアメリカ映画の影響が大きいように思います。

それにしても、イルカの追い込み漁を残酷だと、目の敵にするのは何故なのでしょう？

中日新聞新宮支局長の吉岡逸夫氏によれば、シー・シェパード幹部のスコット・ウエスト氏は「イルカは牛等に比べて人間に近い。我々と同じような複雑な頭脳と形態を持っている。彼らは文化的な共同体を持ち、自身の言葉や歴史を持っているから人間に近い。他の家畜とは違う。彼らは尊敬され、守られなければならない（同氏前掲書）」と述べたとしています。

イルカが人間にどの位近い存在なのか、科学的には良く分かりませんが、欧米人からすると、イルカは可愛くて頭が良い動物なのに、そのイルカを食べる日本人はいかにも野蛮に見えるのかも知れません。

しかし、野蛮といえば、5月24日付の日本経済新聞に、オーストラリアではカンガルーの肉が市民権を得ているというレポートが掲載されていました。日本人の目からすると、「あの可愛いカンガルーを食べるなんて、可哀そう」とか「残酷だ」と感じる人も少なくないと思います。こうした感じ方は、食文化の違いから来ているのだと思います。

また、牛を神聖なものとして崇めているインド人からすると、牛を平気で食べる欧米人は、野蛮だと思っているかも知れません。しかし、それを欧米人のように殊更に問題にして大騒ぎしないのは、食文化の違いに対する配慮があるからではないかと思います。

日本人にとっては、イルカやクジラは共に食料として貴重な海の資源ですが、吉岡氏が上述書の中でデンマークのフェロー諸島でのイルカ漁の様子をレポートしているように、イルカを食べるという習慣は決して日本だけのものではありません。にもかかわらず、太地町のイルカ追い込み漁を狙い撃ちするかのようなWAZAの対応について、和歌山県の仁坂知事は、「いじめだと思う。フェアに考えてもらいたい（5月14日付朝日新聞から）」と批判していますし、太地町の三軒町長も「国際的な問題にしようという反捕鯨団体がやっている事にJAZAが屈服した」と批判し「我々は漁業者を今後も守って行くし、漁をやめない（5月21日付朝日新聞から）」と述べています。

こうした思いは、多くの日本人に共通しているように感じていますが、ただ、その一方で、欧米では、水族館で展示されるイルカは繁殖が主流となっているという現実も直視する必要があります。

動物園や水族館は、野生生物の展示だけでなく種の保存や繁殖に積極的に貢献して行くべきだというのが、時代の潮流なのだと思いますが、日本の水族館は、そうした時代の流れに十分対応して来なかったともいえます。

今まで、日本の水族館がイルカの確保を太地町の追い込み漁に頼ってきたのは、繁殖によりイルカを確保するためには、展示用と出産用のプールを別々に用意する等の新たな投資が必要な上に、出産後の飼育も難しく、国内での繁殖の成功は一部に留まっている事が背景にあります。しかし、イルカ漁に対する風当たりは今後とも弱まる事はないと思われまますので、資源の持続的な利用に努めている日本の姿勢を科学的に、また、より丁寧に説明する等、イルカ漁に対する国際理解を深める努力をする一方で、イルカの繁殖についても積極的に取り組み、水族館のイルカは原則繁殖という状況に早急にして行く必要があるでしょう。

また、個々の水族館で対応策を講じる事は事実上困難だと思われまますので、全ての水族館が協働して取り組むべきで、そのためにも、JAZAが積極的にイニシアティブを取る必要があると思います。

(塾頭 吉田洋一)